

## 偶然？必然？

昨年6月の終わりに菖蒲沢海岸でダイビング講習を受けている時のことでした。私は、水深10mの砂場で体長60cmを超える大きなヒラメに、偶然出会いました。そいつは、威風堂々と砂の上に鎮座し微動だにしません。ただ、目玉だけをぎょろりと動かし、近づくな！とでも言いたげに私を睨み付けました。まさに王者の風格でした。しばらくして、今度は、孵化直後と思われる仔魚の群れに囲われました。私の周囲は無数の仔魚で溢れ、さながら仔魚のスープの中を泳いでいるような錯覚を覚えました。最初に遭遇した大きなヒラメも生まれたばかりの時は、海を漂う仔魚だったはずです。その仔魚が王者となるまでにどれだけの危険を（偶然に？）回避してきたのでしょうか？

多くの魚介類は莫大な数の卵を産みます。例えば、ヒラメは2~3ヶ月の産卵期間に1回当たり数十万粒の卵を何回も産みますし、サザエも1回の産卵で数十万粒を産みます。卵は産卵直後から激しい食害を受け、孵化し成長して、親となって子孫を残せる個体は極僅かです。極めて単純に考えると、2個体の親から得られた受精卵のうち2個が親になって産卵を行うことができれば、その個体群数は維持されます。もし、4個が親になれば個体群数は2倍に、6個が親になれば3倍になります。

下田や南伊豆では、平成20年頃からサザエの漁獲量が増加傾向にあり、平成22年の漁獲量は平成20年の約5倍にまで増加しています。産出されたサザエの卵が親にまで成長するまでに、飢餓や食害といった多くの危険が待ち受けています。漁獲サイズ以上に成長してからは、漁獲によって死亡する個体も多いことでしょう。産出された数十万粒の卵のうち、多くの幸運が偶然に重なることで、平均して約10個が親にまで成長すれば個体群数は約5倍になり、漁獲量の大幅な増加、すなわち“サザエの大発生”に繋がります。

統計資料を調べると、サザエの大発生は、概ね10年周期で起きています。しかし、大発生時の漁獲量は長続きせず、2~3年で大発生前の漁獲量にまで減少しています。減少はどのように説明できるのでしょうか？すべての生物は死を免れることはできず、増える以上に死ぬ数が多ければ個体群は必然的に減少します。産卵することなく死亡することになれば、個体群数の減少は加速的に進みます。サザエに限らず、アワビなどの磯の生物は、浅い岩礁域という限られた空間、環境の中に生息するために個体群数は少なく、死亡する数が僅かに増えるだけで個体群数は減少するでしょう。磯の生物が減少しないよう、岩礁域の保全と乱獲を減らす努力が大切と考えます。

(海野幸雄)